

「戦争責任」論について
—1940年代後半期の「戦争責任」意識を中心に
柳沢 遊（慶應大学）

1950年代半ば以降、日本国家の戦争責任をめぐる研究は、さかんになり、現在では、国家レベル、知識人レベル、都市・農村の民衆レベルでの諸研究があいついでいる。1950年代後半に起きた「昭和史論争」、「主体性論争」「大衆社会論争」「軍封帝国主義論争」は、いずれも、①「戦争の長期化の責任」をだれがどのように、引き受けるのか、②だれが、いつどのような形でアジアへの戦争を始めたのか、③その戦争を民衆が阻止できなかったのはなぜか、という問いと深く関連していた。これらの問いにたいするその後の研究については、家永三郎『戦争責任』岩波書店、吉田裕『日本人の戦争観』岩波書店、に詳細な記述がされている。また、戦争を遂行した推進勢力とそれを受容した民衆意識の双方に視野を広げて問題提起した代表的研究者には、丸山真男と藤田省三がおり、それぞれ、『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、『全体主義の思想経験』みすず書房、という書物で知識人世界に大きな影響をあたえてきた。「戦争責任」の今日的到達点をみるうえで、上記の研究は、重要であるが、民衆ひとりひとりのミクロな生活にまで視野を広げた実証研究は、それほど多くなく、戦時一戦後の日記分析、各種アンケート調査に依拠した研究にとどまっている。

本報告では、第2次世界大戦直後の民衆レベルでの「戦争責任」意識の萌芽に焦点をあてて、未定型なかたちで噴出してきた「指導者責任」論や「戦争敗北」責任論の具体像を明らかにしてみたい。日高六郎は、1963年に執筆した論文で、「第二次世界大戦にまきこまれた民衆が、戦争をどのように体験的に潜り抜けたかは、一様ではない。厭戦あるいは反戦の感情にすら大きなニュアンスの違いがあるのだ。平和のイメージそれ自体にニュアンスの違いが生まれてくるのは当然である。」と述べている（『岩波講座 現代⑩ 現代の民衆』岩波書店、1964年、8頁）。同様のことは、戦争責任についてもいえ、戦争責任意識とその萌芽形態を探る際に、「戦争のくぐりぬけかた」と「戦後の生活」の多様性を考慮に入れる必要がある。そのための第一歩として、敗戦直後の「自分と戦争との関連」意識に照明を当てるのが本報告の課題である。そうした未定型な「戦争責任」論は、1950年代後半以降に論壇をにぎわす「逆コース」に対抗する質をもった「戦争責任」論の諸相と直接には連続しないが、「戦争」と「責任」という次元を異にする2つの事柄にたいする民衆レベルでのうけとめ方を今日レベルであらためて考察するうえで、有益と考えるのである。素材として、大串潤児『銃後の民衆経験』岩波書店、北河賢三『戦後の出発』青木書店、の事例を用いることとしたい。報告から予想される結論は、以下のようなものである。

敗戦後、農村地域や地方都市で生活する青年たちには、戦時中の「供出」「配給」などの不正に係わる「指導者責任」追及の声が大きく、それと国家レベルの戦争推進勢力への批判とが重なっている場合が少なくなかったことが、大串潤児の研究から明らかになった。北河の研究は、そうした「指導者責任」の追及は、敗戦後に澎湃としてまきおこった文化運動のなかで、「自分は、何をやってきたのだ」「どうして、どん底の生活とみじめな境遇に突き落とされたのか」という知的欲求、文化的な人間回復要

《第2分科会》
戦争責任

求と絡み合っていたことを示した。

「敗戦」への悔しい思いと脱力感は、戦後の青年たちに共有されていたが、それは、戦時中の「不正」の徹底した追及に向かう場合もあり、村長辞任運動運動に向かう場合もあった。いっぽうでは、翼賛青年運動との人的連続性が見られる場合もあり、日高のいう「戦争のくぐり抜け方」の多様性におうじて陰影があったといえよう。そして、戦争中に村をあげて送出した兵士の帰還、遺骨の帰国にたいして、多くの人たちが冷淡で「見て見ぬふりをする」態度をとることに、批判的な青年たちが各地に存在し、「時代の変化」を受け止めながらも、同世代の青年たちの境遇の落差に思いをはせる青年たちが数多く存在していたことが、2人の研究から明らかにされた。ここには、「敗戦の受け止め方」の世代差、地域差、ジェンダー差というむつかしい論点への突破口がかいまみえる。また、「一億総懺悔」論への違和感や「だまされた意識」の複雑な構造が明らかになったことも指摘しておきたい。

今回の報告は、「戦争責任」論の現在を問い直す作業からみると、そのスタートラインに立った段階に過ぎないが、「加害者責任」「侵略責任」論が台頭する以前の時代である1940年代後半の「戦争意識」の究明によって、「戦争責任」研究を「戦争体験史」研究と架橋し、戦後の平和運動の複雑な構造とその歴史的特質を究明する手がかりを得ることに途を拓くものである。